



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

1. 抜錨編〈上〉

ALPHAOLTS LIGHT

柳内たくみ

Takumi Yanai

ALPHAOLTS 文庫



主な登場人物

Main Characters



シャムロック・ハ
エリクシール

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



ケミイ

海で暮らす
アクアス族の女性。
人魚のような特徴を持つ。



徳島甫
とくしまはじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



ヴォイ・ド

ティナエ諜報機関
『黒い手』の一角。
プリメーラの船に乗り込む。



オデット・ゼ
ネヴユラ

翼皇種の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田島五郎
えだしまごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

エドモンド・チャン 特地碧海で行方不明となったジャーナリスト。

黒川雅也 海上自衛隊の潜水艦『きたしお』艦長。

藤堂鉄男 日本国の外交官。

アマレット プリメーラ付きのメイド長。

カイピリーニャ

エム・ロイテル ティナエ海軍海佐艦長。

キュラソー ティナエ海軍海尉。

イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書を務める巫人種。



シュラ・ノ
アーチ

帆艇アーチ号船長。
正義の海賊アーチ族。
プリメーラの親友。



プリメーラルナ
アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺



●ロンデル

帝都●

●イタリカ

○アルヌス

碧海

エルベ藩王国

グラス半島

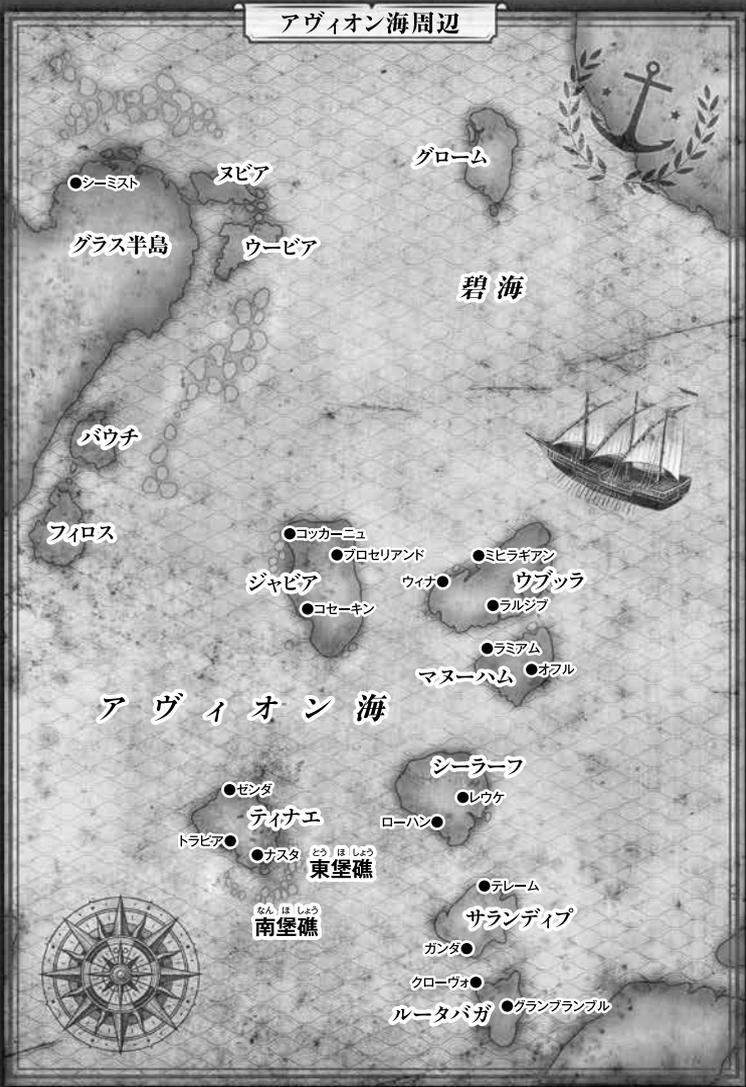
トエマレン

アヴィオン海

碧海



アヴィオン海周辺



序

特別地域／アヴィオン海／北緯二九度・東経一五度

ロンデル標準時〇七二三時——

險を下ろし、五感全ての神経を聴覚ひとつに集中する。

昏い、暗い深海の闇の中、レシーバーを通じて聞こえてくるのは波の音、小さな泡の潰れる音、色彩鮮やかな魚達の囁り。

海を満たす様々なざわめきに覆われた向こう側の気配を探るために、計器を操る指はそっと静かに、あたかも壊れやすいガラス細工でも扱うような慎重さで動く。

「……………」

邪魔な息を凝らし、心拍すらも抑え、四方八方から届く雑音のボールを一枚、また一枚と剥いでいく。そんな作業の繰り返し果てに、ようやく目標の姿を臚気ながらに見

出すことが出来る。それは砂浜に落とした一本の針を、手の感触だけで探そうとするようなものかもしれない。

「……どうだ、いるだろ？」

海上自衛隊所属、おやしお型潜水艦『きたしお』。

その薄暗い水測室で、レシーバーから伝わってくる音になるかならないかの、鼓膜に触れる程度感覚に集中していた松橋二等海曹は、水測員長の問いかけに、「しっ！」と返す。そして指先で慎重に操作卓のポリウムを手練りつつ喉を鳴らすように応えた。「確かに、員長の仰る通りです。『にししお』の持ち帰った音に似てる感じがあります。でも、同じかどうかまでは、まだ何とも……」

「いや、いい。お前が似ているって思うだけで十分だ」

水測員長片桐一等海曹はそれを聞いてニヤリと微笑んだ。

発令所——潜水艦の一切を取り仕切るそこは、大型バスの椅子を全て取っ払ったよりも、一回り広い程度の空間である。

その中央には中之島なかのしまと呼ばれる一段高くなっている場所があり、神殿の柱のごとき潜望鏡が前と後ろに合わせて二本、天井から床に穿たれた孔を貫いて階下まで伸びている。

左右の壁面には艦をコントロールし、あるいは情報を集め戦闘をするためのコンソールが並び、乗組員達が中央に背を向けるようにしてそれらを操作している。付け加えると左舷前方ひだりへんの奥まった座席には、操舵員が進行方向に向かって座っている。ここが潜水艦のコクピット——操舵席である。

しかしそこに座る者の姿は、バスや航空機の操縦席を見たことのある者にとつて奇妙に感じられるだろう。何しろ窓のない計器ばかりの壁に向かって舵を握っているのだから。つまり前方が全く見えない。しかしそれで不都合がないのが潜水艦なのだ。

彼らの背後には、左舷側と右舷側それぞれの乗組員達を分掌・監督する潜航指揮官と哨戒長付きせうかいちやうが一人ずつ、更に中之島には全体を統括する哨戒長が立って彼らの仕事ぶりに目を配っていた。

哨戒長の小松島三等海佐は少し苛立つように爪を噛んでいる。スピーカーから漏れ聞こえる水測室からの声が、先ほどから落ち着かない様子だったからだ。

『発令所、ソーナー。艦首方向やや右に何かがあります。S八五とします』

「S八五の正体が何か、分かるか？ この特地の海ではどんな化け物が出てもおかしくないからな。備えるなら早め早めにおきたい」

『データがあまりにも不足しているため確信をもって言うことは出来ないんですが、松

橋は『にししお』が持ち帰ってきたサンプル音に良く似ていると言っています』

「松橋が、か？」

「はい、松橋が、です」

松橋という水測員は一種の天才で、人並み外れた聴覚と、機械よりも優れた分解能を持つ。これまで日本近海に侵入したロシア、中国、韓国、北朝鮮、果ては米国の潜水艦までも驚嘆すべき距離から探知してきた。その男が疑わしいというなら、それだけで充分な説得力を持つのだ。

小松島三佐は、待っていた答えがようやく出たとばかりに勢いよく振り返った。

「艦長。特別無音潜航を令します」

「うむ」

黒川雅也一等海佐は頷く。

両舷を一望できる発令所の最後部、海図台を背にする位置に、赤いカバーのついた折り畳み椅子があり、そこに腰を据え、全てを睥睨しているのが艦長であった。

艦長は潜水艦の言わば大脳だ。

潜水艦は艦長の肉体であり、乗組員達は一人残らずその臓腑器官に喩えることが出来る。肉体は脳に従って動くもの。全ては艦長の裁可の下に行われ、その節度と意思に従

う。中級指揮官はいわば脊髓。反射運動に限っては命令することが出来るが、それでも脳のコントロールを受ける。

「特別無音潜航はじめ」

小松島三等海佐は令した。

「全艦、発令所。特別無音潜航、はじめ！」

艦内通信を担当するIC員から伝えられた命令によって、『きたしお』艦内に流れていた空気は、ぴたりと止まったのだった。

* * *

調理室で包丁片手にじゃが芋の皮を剥いていた徳島二等海曹は、素早くその芋の欠片を口へと運んだ。一欠片、そしてもう一欠片。

「うん、これはいい味だ。美味しくなれる芋だ」

若干の青臭さは残るものの瑞々しさのある歯応えに彼が頷いた瞬間、全艦内に向けた放送が流れた。

『全艦、発令所。特別無音潜航、はじめ！』



「特無潜!？」

どんなに忙しくしようとも、彼が命令を聞き逃すことは滅多にない。それは彼の名前が『甬』だからかも知れない、通常は耳を通じて脳で処理された後に入ってくる音が、肌を通じてダイレクトに魂に響くのだ。

おかげでいつ何時降ってくるか分からない命令に、戸惑うことなく反射的に従えるようになるのは同期の仲間よりも早かった。

自衛隊に入ったばかりの頃、普通の間人は「命令とは何か」を理解することに戸惑い、受け入れ難く思うものだ。しかし徳島はこう解釈した。命令とは要するにこちらの都合お構いなしに下されるもの。トイレに入って大きい物をひり出している真っ最中だろうと、シャワーを浴びてる最中だろうと、その命令が発された瞬間、全てを中断してしゃべりべき役割を果たすべく配置に向かうこと。それが乗組員に課せられた責務であり、価値ある物を生産しているわけでも、売っているわけでもない自分達が世の中から給料という分け前をいただくために差し出せるせめてもの対価なのだ。

とはいえ、このタイミングでの特別無音潜航は徳島にとっては最悪だった。現在『きたしお』の艦内で起居する人員は、員数外の徳島らを合わせて七十四名。調理室はその男達の空腹を満たすための食事を作っている真っ最中なのだ。

「ちっ、せつかくのじゃが芋が……」

徳島はじゃが芋の白い素肌の変色が少しでも遅くなるようにと、ジッパー付きビニルに入れて冷蔵庫に運び込んだ。

まだ皮の付いている芋は大丈夫なので科員食堂の椅子の下にある保管箱に戻す。そして他の給養員や第四分隊の乗組員とともに調理場の器具全てを止めて回った。

「徳島、こっちの箱だ。急げ！」

「了解っ！」

そして保存食の入ったダンボールを給養員長と一緒に倉庫から取り出す。

特別無音潜航とは、冷蔵庫だろうとエアコンだろうと、推進器以外のありとあらゆる機械を止めて音を立たないようにすることを意味している。配置に就いていない非乗組員達などは酸素の消費量を抑えるべく全員がベッドに入って息を潜めていなくてはならない。つまりはトイレに行くことすらままならない（ドアの開け閉め、水を流す音の発生を防ぐため）、最高レベルの静寂が要求されるのだ。

もちろん調理場の機能も停止してしまうので代わりとなる食事が必要だ。七十四名の乗組員達はこの特無潜の態勢が解かれるまで、味気ない缶詰で耐え続けるしかないのである。

「えっと、松橋二曹のベッドは……ここか！」

徳島は発射管室の下にある居室、三段ベッドの一番上によじ登ると、転がるようにして横になった。『きたしお』の正規の乗組員ではない……つまりはお客に過ぎない彼の寝床は、本来発射管室にずらりと並ぶ魚雷の隣だ。だが特無潜が令されるような情勢時は、発射管室が非常に忙しくなる可能性がある。そのためこうした際は空いているベッドを借りることになっていた。

「この特無潜、いつまで続くんだ？」

潜水艦乗組員用のベッドは、寝返りするのも難しいほどの隙間しかない。しかし松橋二曹のベッドに限っては天井までが少し広くなっていて圧迫感が少なかった。

とはいえそれだけの空間が一番上の段に与えられるのはそれなりの理由があるわけで、実際には太いパイプが横切っていたり、換気のダクトが口を開いていたりと居住性の悪さでは他に引けを取らない欠点を持っていた。

「さあな。この特地の海じゃ、潜水艦に乗って長い俺ですら何もかもが初めて尽くしだ。自信を持って知っていると云えるのはこの『きたしお』のことだけ。予想なんてつかねえよ」

隣のベットにいる給養員長の夏沢二等海曹が、ぐぐもった声で不満そうに答える。
更に下のベットの高田三等海曹からも話しかけられた。

「心配しなくて大丈夫ですよ徳島さん。俺達が、ちゃんと目的地まで送り届けてあげますから安心してください。異世界の海でだって、『きたしお』は最強です」

「いや、そうじゃなくってじゃが芋のことが心配で」

「心配ってそっちのことですか？」

一番下の段の幸田三等海曹が笑った。

「本当に料理オタクですよね、徳島さんは……けど、その思いは俺らも同じです。こうしている間にも野菜がどんどん萎びていきます。せつかく苦勞して鮮度を維持するよう頑張ってきたっていうのに」

傷みややすい生糧品を守るため、給養員の夏沢、高田、幸田らは野菜の傷んできたところは筆^{むし}、褥瘡^{じよくそう}が出来ないようにこまめに寝返りを打たせ、空洞には綿^{わた}を詰めるという細心^{しん}で丁寧^{ていねい}に管理してきた。なのに肝心の調理を中断させられてしまった。これが長く続くと今までの手間が全て無駄になってしまうのだ。

もつとも、潜水艦は旅客船ではない。戦うための船だ。優先されるのがどちらであるかは自ずと知れる。こういう時に苦汁^{くじゅう}を舐めることもまた給料の内に含まれているのである。
ある。

「質の良いじゃが芋なんだけども……」

徳島は手を軽く上げただけで触れることの出来る天井を眺めつつ嘆いた。そして時と共に風味の落ちていくじゃが芋のシャキシャキした味を反芻^{はんそう}した。あれでどんな料理が作れたかと考えてしまうのだ。コロッケ、芋グラタン、ハッシュドポテト……それらの料理へと昇華できる可能性が、刻一刻と失われていくことが彼には悲しく思われてならなかったのである。

凍り付いたような空気の中で、時計の秒針が一周また一周と音もなく回っていく。

その間にも発令所には特別無音潜航の態勢が整ったという報告が各所から送られてきた。機械室、調理室、各居室等……。そして、ついに『きたしお』艦内の全てが静寂に包まれた。

そのまま十分、二十分と過ぎ、やがて三十分を過ぎた頃、艦長の黒川は声を抑え、しかしながら発令所内の誰もが聞き取れる音量で令した。

「取り舵五度。ゆつくりとだぞ」

舵を大きく速く動かすと、どうしても機械が音を発して敵に気付かれてしまう。これ

を避けるためにあらゆる操作をゆっくりと、最小限に抑えなければならぬ。

「とーりかーじ」

操舵員の木内海士長が復誦しつつ舵をゆっくりと左に切る。

艦は少し遅れて艦首を左に向け始めた。艦の針路を示す数値はゆっくりと変わっていき、その数値が一四二度に達する僅か前に、無電池電話を装着して艦内のあらゆる箇所との連絡を引き受けるIC員が告げた。

「発令所、ソーナー。S八五の方位二二一度。感一。鰭進音らしい！」

潜水艦のソーナーは曳航ソーナーを除けば艦体の横つ腹に装備している物をもっとも感度が良い。艦首の方向を左に逸らし、S八五に右舷を向けたことで側面アレイが音を拾ったのだ。

鰭進音という呼称は、この特地に来るまでは乗員達にとつてもあまり耳慣れないものだった。これまで生き物の立てる音は全て魚鳴音として一緒くたにされていたからだ。

それは生き物が潜水艦にとつて脅威となることがなかったからなのだが、特地の海では二つの音を分類して警戒する必要が生じていた。

「一四二度ソーソー」

黒川は操舵員にソーナーが効果的に働く針路を維持するように命じた。

「一四二度ソーソー……ソーソー一四二度」

取り舵の勢いを打ち消す当て舵を終えて針路が安定したことが知らされると、黒川は「ソーソー」と返し、爾後はS八五の監視に意識を向けた。

「S八五の識別は？」

問いかけるとIC員が送話器に囁く。そして戻ってきた返事に聞き耳を立てて黒川に告げた。

「未だ確証得られず……」

厄介なのは鰭進音を立てているこの目標が何なのか、判別が難しいことだ。

これが果たして無害な海棲生物の発する音なのか、それとも『敵』なのか、データがなさ過ぎるのだ。

「曳航ソーナーを出しますか？」

船務長でもある小松島三等海佐が囁く。

「いや、いい。必要なら片桐が言ってくる」

だが黒川はそれを制し、全てを肯定するように頷いた。

余計なことは言わずとも、水測員長の片桐が全力を尽くしているのは分かっている。急かそうとも励まそうとも、それが理由で目標の識別が早く進むということはない。

従って黒川が今なすべきは、報告が上がってくるのを待つこと。焦る気持ちを表に出さず、どつしりと腰を据えた姿勢で瞑目したのだった。

艦内時間一二二一時——

「S八五を失探？」

水測室を訪ねた艦長の黒川に、片桐水測員長は申し訳なさげに告げた。

「シャドーゾーンに入ったものと思われませ……」

片桐の悔しさの籠もった口調を聞くと、黒川は唇を噛みつつもすぐに気を取り直して告げた。

「探し続ける」

本当に存在していた物なら消えてなくなることはない。きつとまだそこにいるはずなのだから。

「了解」

水測室を出て発令所に戻りながら「さて、どうしたものか？」と自問する。

「潜水艦の戦いは、狙撃兵同士のそれに似ている」とは誰の台詞だったろうか。

物語や映画では、ギリースーツに身を固め狙撃銃を手にした兵士が、森や草むらに身を伏せた敵を見つけ出し、銃を構えて引き金を引く瞬間のみが描かれる。だが、狙撃兵の戦いの神髄はそこに至るまでの過程にある。

敵の思考を読み、出し抜き、有利な位置を占めるための、壮絶な忍耐を伴う命がけの駆け引き。何時間、あるいは何日間も地に伏せ、泥にまみれ、虫にたかれ、糞尿を垂れ流しつつ手にした寸毫のチャンスに、ようやく射撃の腕を見せられるのだ。的当てが上手なだけなら、すぐに死んでしまう。

潜水艦の戦いとしてそうだ。しかもこれに関して言えば、『有事』も『平時』もない。海の中に姿を隠し、敵を探す」

言葉にすれば簡単なはずのこの一言だが、そこに含まれている意味は、とてつもない忍耐と労苦と思考と計算の積み重ねだ。物語として語るには地味に過ぎて退屈する。

「現在の海況は？」

黒川の問いに対し、「一二〇〇時を境に哨戒長に上番した厚木一等海尉が答えた。「我が艦の深さ二二五メートルにおける水温一二・三です」

潜航長の手によって、深さは黒川が令した数字ブライマイ五〇メートルの範囲で維持さ

れている。深さの許容幅を大きく設定したのは音を立てないため、操作を最低限に抑えているからなので仕方がない。しかし、それに伴ってここ数分の間に大きく変わった数字があった。

「海水温度が先ほどから変わったか？」

「はい」

勝手の分からない海に苛立った黒川は、舌打ちしつつ立ち上がって背後の海図台を振り返った。

海水はしょっぱいが、その濃度は場所や深さで異なる。

海水は総じて冷たいが、その温度は場所や深さで異なる。

そしてこの二つの要素は、深さに伴い高くなる水圧と同様、音の伝達速度に大きく影響する。温度、塩分、水圧、いずれも高くなればなるほど、音は速く伝わるようになる。音は、その伝播速度が遅い方に向けて屈曲する性質があるため、四方八方、同心円状に放たれた音も、塩分や温度の違う塊や層を通り抜けていく内に音の届かない場所が出てくる。

これをシャドーゾーンと呼び、潜水艦はまさにそのゾーンを利用して敵から己の姿を隠蔽するのである。あたかもギリースーツを纏って草むらに身を潜める狙撃手のように。

これまで『きたしお』がいた海域は遠浅で、海面付近とそう大差のない水温が一五〇メートル前後にまで広がっていた。しかしこの辺りから海底は崖のごとく急激に落ち込んでいて、表層とは温度も塩分濃度も異なる水塊が底に溜まっていたらしい。その水塊の上縁に、『きたしお』は知らないうちに潜り込んでいたのだ。

おかげで今現在、S八五の発した音波は『きたしお』を避けるように下方へと向かう。そのために音の聴知が出来なくなっていた。

対策として手っ取り早いのは艦の潜度を変えることだが、S八五を失探した状態ではそれは避けたい。潜度を変えるといえるのは舵を動かすことであり、音を立てることに繋がるのだ。

これを狙撃兵に喩えて言うなら、敵を探すために移動を試みてがさがさと草むらを探すってしまうのと同じだ。もしS八五が敵で、こちらを注意深く見ていたら一発で居所が知れる。次の瞬間には敵の放った必殺の弾丸が飛んでくるのである。

結局、黒川はこのまま潜度、速度共に維持することにした。

海底の深度を慎重に測りつつ、静かに静かにゆっくりと進む。急がず、焦らず、忍の一字。それが深海という戦場で生き残るための要諦なのだ。

艦内時間 一四一五時――

特別無音潜航が令されて約七時間。『きたしお』は舵の利く最低の速度でゆっくりと進んでいた。

発令所の指揮を哨戒長に任せた黒川は、再び発令所を出て水測室を覗き込む。

「ん、なんでお前達が？」

すると水測員長の片桐と松橋の二人がいた。

潜水艦は三直に分かれて通常六時間で交代する。十二時を境に次の直に入っているのだから、二人とも休息に入っていないなければならない。なのに二人はコンソールにしがみついて離れようとしなかった。きつとS八五の正体を暴かないまま申し継ぎは出来ないという心境なのだろう。

「多分……いや、間違いなくこれがS八五ですね」

レシーバーに手を当てた松橋が臉を軽く閉じたまま呟いた。

「本当に、見つけたのか？」

「はっ」

黒川はL O F A R GラムやB T Rのモニターに目を向けた。

それらには海中を伝播してくる音に含まれる様々な成分が、色や形状として表現される。しかしはつきりと分かるような画像は表示されていない。

それでも松橋は自信ありげに言った。

「間違いありません」

黒川は「そうか」と首肯した。

どれほど技術が進んでも、もつともあてになるのは人の耳であり、経験を積み上げた人間の勘だということを黒川は知っている。最新技術で作られた機器は人間を助けるために存在する。つまりは人間が主であり機械は補助でしかない。

「方位は？」

「方位二五〇。やや右に落ちて行っています」

「それで松橋、S八五は『にししお』が持ち帰ったサンプルと同じか？」

「目標までの距離があるせいで波長の短い音は減衰し、聞こえるのは波長の長い音だけになります。おかげで『にししお』が持ち帰ったサンプルと同じとまでは言い切れません。もつと短い波長の音が入ってきませんと……」

「そうか……。S八五がこちらに気付いている様子？」

「いえ……動きは、ゆっくりと真っ直ぐです」

「分かった。引き続き目標の監視を続けてくれ。それと片桐、そろそろ交代しろ。肝心な時にお前達が役に立たないってのが一番困るんだからな」

「了解しました、艦長」

片桐水測員長の満足げな返事を聞きながら黒川は水測室を出た。

数歩進んで発令所に戻ると、士官室係の海士長が黒川を待ち構えていた。

「艦長、食事をお取りください」

「しばらく自分が発令所に詰めています。艦長は士官食堂でどうぞ」

副長兼航海長の八戸二等海佐が士官室係に口添えるかのように言った。

昼食寸前に失探してしまつたため発令所に詰めていた黒川は、そのまま昼食を取り忘れていたのだ。だが、S八五の位置が改めて判明したのだから、指揮を哨戒長に任せて食事を取りに行つても確かに問題なかつた。

「そうか。……そうだな。ありがとう。では哨戒長は現針路を維持してS八五の監視を続行。副長、S八五に特に変化がなく無事にやり過ごせるようなら……そうだな、五時間後に元の航路に戻る航行計画を立ててくれ」

「了解。一九一五に旧針路に復するための航行計画を立案します」

「頼む」

黒川は発令所の指揮を哨戒長に任せると、士官食堂へ向かつた。

おやしお型潜水艦の通路の狭さは、例えるならJR特急電車の乗降口あたりに似ている。トイレがあつたり、客室乗務員室があつたり、洗面所があつたりするあのスペースである。

その通路沿いにあるこれまた狭い開口部を潜ると、士官食堂があつた。

士官食堂の艦長用の席には、乾パンと缶詰の載つたトレイが置かれていた。

特別無音潜航を令している間は煮炊が出来ないからこの食事は当然の有り様だつた。潜水艦の美食に舌が慣れきつていた黒川もこれには流石に泣けた。黒川ですらこれほどがっかりした気分になるのだから、一般の乗組員達は大いに不満を抱いていることだろう。

唯一の救いは芳醇な香りを漂わせているコーヒーだけだつた。

「艦長……S八五は『にししお』が遭遇したというアレでしょうかねえ？」

とりあえず出された食事を終えて、黒川がコーヒーを楽しんでいると、食卓で暇を託つていた一等海佐の階級章をつけた作業服の男が声を掛けてきた。

この男は江田島五郎。

情報業務群・特地担当統括官というあまり耳にしない肩書きを持ち、特地に関わるあらゆる事柄を引き受けている。普段は海上自衛隊が活動する上で必要となる情報収集を行っており、船が現在位置を知るために必要な天文年鑑を作成するための資料をロンドルの天文学者と交渉して獲得したのもこの男であった。

そんな男が『きたしお』に乗りこんできたのも当然、任務のためだ。『きたしお』の役目はこの男を目的地へと送り届けることなのだ。

「おそろくは、そうだろうな」

黒川は『にししお』の艦長の佐久間一等海佐を思い返しつつ頷いた。

『にししお』とは特地の海域に初めて進出した海上自衛隊の潜水艦だ。

特地の海については今でもろくな海図がない状況だが、三カ月前はもつと酷かった。

『にししお』は初めてプレイするダンジョンゲームのマップングをするような慎重さで、少し進んでは浮上天測し、潜航しては測深、海水の水温、密度、流速といった海況情報の収集をしつつゆつくりと進んでいた。

そしてある日突然、目標と遭遇した。

だが『にししお』の佐久間艦長は自らの役割を心得ていた。敵の情報を持ち帰ることこそ第一の使命と考え、あわや撃沈される寸前になりながらも、艦と乗員、そして貴重

なデータを母港に持ち帰ることに成功したのである。

その時の経験やデータはもちろん『きたしお』にも引き継がれている。

ふとその時、副長が士官食堂に駆け込んできて告げた。

「艦長、七枚の鯨進音聴知！ 松橋が断言しています。S八五は『にししお』を襲った鯨鯨に間違いないし！」

黒川と江田島はコーヒーを飲む手を止めて発令所へと戻った。そして現在の自艦の深さと海底までの距離を確認すると、報告を求めた。

するとこれまでに判明したデータが次々と報告される。

「目標運動解析、出ました。的針〇二九度。的速一二ノット。最近接距離は四三〇〇です！」

「意外と行足が速くなってるな。このまま、やり過ごせそうか？」

「待ってください、S八五に動きあり！」

するとその時、目標の様子が急変した。生き物にありがちな気まぐれか、それとも何か別の事情があるのか急に挙動を変えたのだ。

何か別の事情!?

自らの思考の隙間に嵌まったその一言に驚愕した黒川が息を呑んだ。

事情とは何か？ それはきつと攻撃する時だ。そう考えが至った瞬間、黒川の背筋に悪寒が走り、全身の皮膚が総毛立った。

黒川は特別無音潜航の沈黙を破る勢いで怒鳴った。

「攻撃来るぞ！ 前進一杯！ 面舵一杯！ 潜横舵下げ舵一杯！ 衝撃に備えっ！」

その直後、カスタネットを連打するような『カカカカカッ！』という機械的な音が船体を叩く。

水測員がモニターに映った画像を睨みながら叫んだ。

「探信音、来たっ！」

この探信音は敵がいるかどうかを確認するといった生易しいものではない。狙いをよく定めるためのものだ。もちろんターゲットは『きたしお』だ。

「おもーかーじいっばーい！ 潜横舵下げ舵いっばーい、ヨーソロー！」

操舵員が復誦しつつ大きく舵を突き出し、そして捻る。しかし実際に船体が反応するまでには僅かながらのタイムラグがあつてそれが疎ましい。

「ヨーソロー、潜横舵下げ舵いっばーい！」

永遠とも思われる数瞬を経て、『きたしお』の艦内通路は右前方に向けた滑り台ほどの急斜面となっていく。

立ち読みサンプル はここまで

卓上の食器や保存食の空き缶などがゴムシートを敷き詰めた床を転げた。

艦内では咄嗟の命令に対処しきれず、乗組員の何人かが壁にぶつかり、床を転げる。

保存食の入っていたダンボール箱を片付けていた夏沢二曹は、それに巻き込まれて盛大に頭を打ちつけてしまった。

『きたしお』は右回転の螺旋を描くように急激に潜航していった。

突如としてジェットコースターが急落するような感覚に襲われた乗組員達は投げ出されないようにベットへとしがみつく。

「くっ……間に合ってくれ」

重い緊張の中で徳島は喘ぐように呟いた。

『シクヴァル、本艦の左舷上方を通過！』

あちこちのベッドから安堵の溜め息が漏れ聞こえる。『にししお』に何が起きたのか、皆が知っているのだ。

通称『ルネサントス鈍鯨』。特地乙種三類害獣に分類される獷猛な海棲生物で、体長は成獣になると五〇〜六〇メートルになる。小型の木造船なら、船ごと乗員が喰われることも少ない。鋸や剣の類はもちろん通じないから特地の現地人はこれを悪神のごとく恐れて